

# 西ノ辻遺跡第26次発掘調査概報

1990. 3

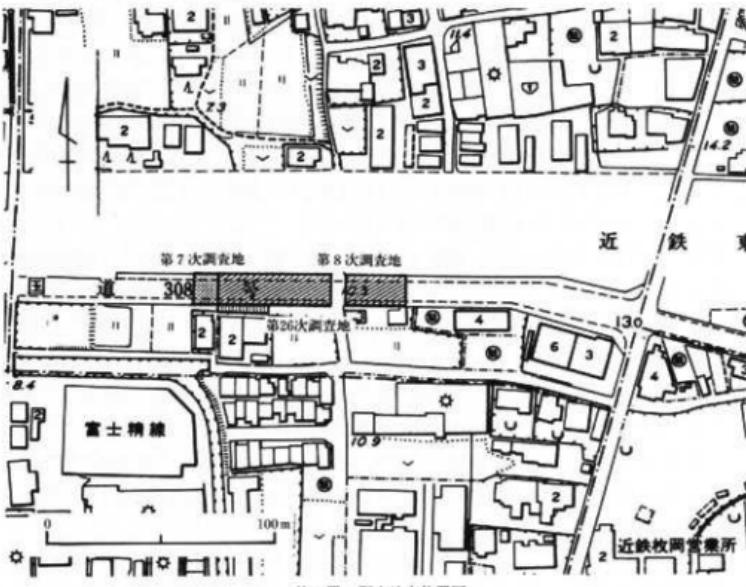
財団法人 東大阪市文化財協会

# 西ノ辻遺跡第26次発掘調査概報

## I. 調査に至る経過

西ノ辻遺跡は弥生～室町時代に亘る複合遺跡である。現在の行政区画では東大阪市西石切町1丁目・3丁目、東山町、弥生町に相当する。西ノ辻遺跡は昭和16年より調査が実施され、弥生時代後期の式標遺跡として学術的にも著名な遺跡である。近年、大阪府、東大阪市教育委員会、(財)東大阪市文化財協会によって近鉄東大阪線建設工事に伴って大規模な調査が実施され、大きな成果が得られている。また、鉄道開通に伴って周辺開発が進みつつあり、マンション等の建設工事が増加している。

今回、西石切町3丁目155-1でビル建設工事が実施されることになった。工事予定地は西ノ辻遺跡内にあり、東大阪市教育委員会文化財課が試掘調査を実施した結果、遺構、遺物が存在することが確認され、事前の発掘調査が必要との見解が出された。原因者と東大阪市教育委員会で協議した結果、発掘調査を実施することになった。発掘調査は財団法人東大阪市文化財協会に委託しておこなった。調査面積は67m<sup>2</sup>であり、現場調査は平成元年7月4日～27日まで実施した。今回の調査は第26次調査になる。



第1図 調査地点位置図

## II. 位置と環境

西ノ辻遺跡は弥生時代～中世に至る複合遺跡である。当遺跡は生駒山西麓の扇状地上に立地し、標高7～20mを測る。現在の行政区画では東大阪市東山町、弥生町、西石切町3丁目に相当する。

生駒山西麓に入々が住み始めるのは旧石器時代からである。当時代の遺跡は標高100m前後の地点で多くみられ、草香山、芝坊主山、正興寺山遺跡などが古くより知られている。近年、鬼虎川遺跡で発掘調査が実施され、縄文時代前期の海岸線が検出された。<sup>①</sup> 海岸線に落ち込んだ状態でナイフブレードや翼状剣片が出土している。

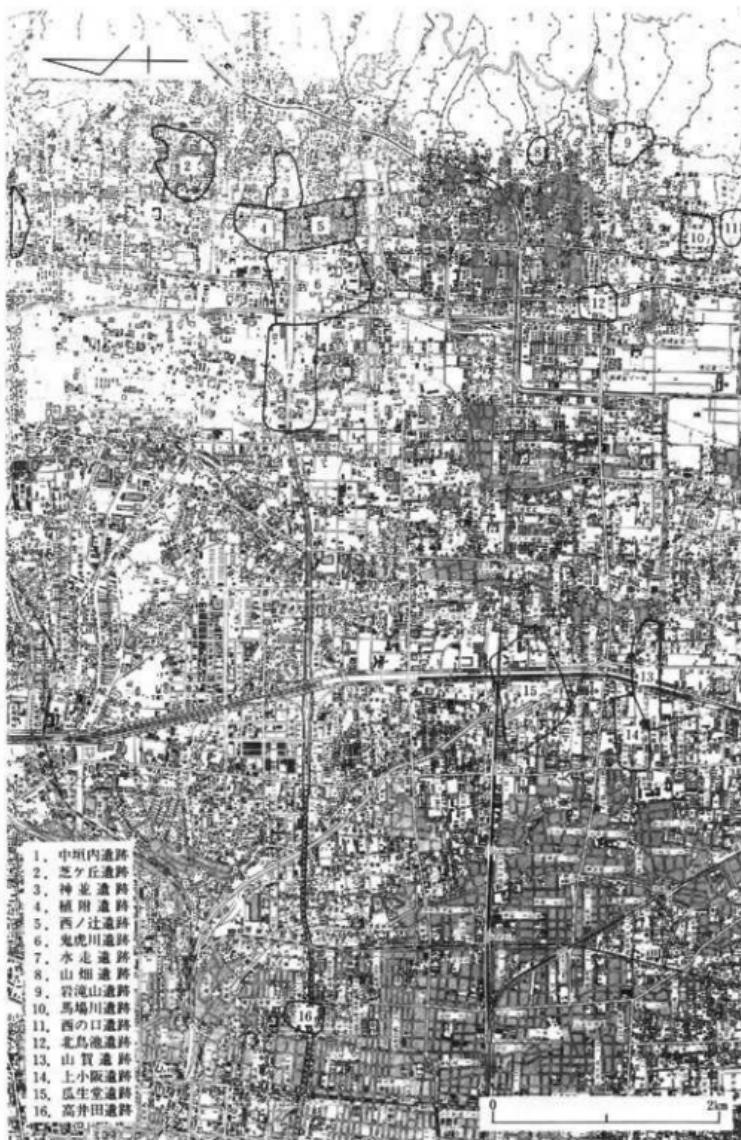
縄文時代になると当遺跡の東に神並遺跡が出現する。神並遺跡は早期の遺跡であり、多量の押型文土器と土偶、石錐、石匙、有舌尖頭器などが出土している。前・中期の遺跡は前述した鬼虎川遺跡があり、当遺跡の西に位置する。後・晩期になると日下、鬼塚、縄手、馬場川遺跡などが出現する。日下遺跡は府下でも数少ない貝塚として著名な遺跡である。近年の調査では環状列墓や室内に炉を有する堅穴住居も検出されている。<sup>②</sup> 縄手遺跡では堅穴住居や石組造構などが検出されている。

弥生時代になると当遺跡が出現する。当時代の遺跡は前代に引き続き扇状地上に立地するもの、標高100m前後の高所に立地するものがある。また、平野部にも出現し、自然堤防上に集落を形成している。前期の遺跡は中垣内、鬼虎川、鬼塚、縄手、瓜生堂、山賀、高井田遺跡などがある。前期に出現した遺跡は中期にも継続し、大集落を形成するものが多い。中期になると新たに当遺跡や植附、山烟遺跡などが出現する。当遺跡では自然河川の谷や方形周溝墓、甕棺、溝などが検出されている。当遺跡の西に位置する鬼虎川遺跡でも方形周溝墓や木棺墓などが検出されており、隣接して墓域があったことが明らかになってきた。<sup>③</sup> また、当遺跡は後期に継続するが、新たに北島池、岩瀧山、馬場川、上小阪遺跡などが出現する。前・中期の遺跡は大集落を形成するものが多いが、後期の遺跡は小規模となる。

古墳時代の遺跡は芝ヶ丘、神並、鬼塚、縄手、西岩田遺跡などがある。また、生駒山西麓の各尾根筋には古墳が數多く造られている。西ノ辻遺跡では自然河川の谷に木組築堤や石組貯水施設などが造られている。<sup>④</sup> 神並遺跡では掘立柱建物が検出されている。古墳は中期の時期のものが東大阪市域では最も古く、塚山、えのき塚、大賀世古墳などがある。後期になると群集墳を形成しており、十基前後から数十基単位で構成されている。墓尾、神並、みかん山、出雲井、客坊山、山烟、花草山、五里山古墳群などがあげられる。

奈良時代以降になると当遺跡では掘立柱建物、井戸、土塹、土塁等などが検出されている。当遺跡周辺には神並、水走遺跡などの集落がある。また、東には法通寺があり、建物基壇などの遺構が検出されている。

当遺跡周辺は旧石器時代より今日に至るまで生活に適した場所であったらしく、各時代の遺構、遺物が存在する。



第2図 道路周辺図

### III. 調査の概要

#### 1. 調査の方法と地区割

今回の調査地は国道308号線の南に隣接しており、同国道拡幅工事および鉄道建設工事がすでに北側で実施されている。同調査では水走、鬼虎川、西ノ辻、神並遺跡を覆う地区割が設定されている。今回の調査では西ノ辻遺跡の第7次調査地に隣接しており、遺構が関連すると考えられたので、地区割を踏襲する。地区割は建設省告示による第VI座標系を利用した。原点を東大阪市川中（X = -146.200, Y = -34,600）に設定し、100m方画を大地区とし、さらに、大地区を5m方画に分割し小地区とした。地区名称は、各々の地区ラインに名称を与え、直交する2方向のラインの名称を組み合せて地区名称とした。大地区的ラインの名称は、南北ラインが原点より東に向かって、I、II、III……、東西ラインが南に向かってA、B、C、……である。小地区的名称は大地区と同様に、南北ラインが原点より東に向かって1、2、3……、東西ラインが南に向かってa、b、c……である。したがって、各地区的名称は、南東隅交点のライン名称となり、原点を含む小地区「IA1a」と表わされる。今回の調査地区はXIX F12h~15hになる。

調査は地表下約1mが盛土であったので機械掘削をおこなった。下層の約40~80cmは遺物包含層であったので人力掘削によって精査した。

#### 2. 層位（第3図）

南壁、東壁の断面実測図を作成した。以下、各層ごとに特徴を記す。

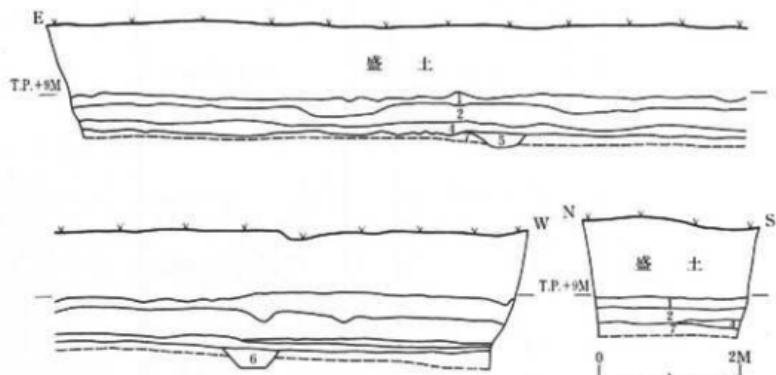
第1層 オリーブ黒色(5Y3/1)に褐色(7.5YR4/4)が斑点状に混じるシルト質粘土層。2~3cmの礫を極微量、3~5mmの礫を少量含む。層厚は約10~40cmを測り、西側で厚くなる。弥生時代~中世の遺物を含む。

第2層 黒褐色(2.5Y3/1)に暗褐色(10YR3/3)が斑点状に混じる粘土質シルト層。2~5mmの礫を少量、炭化物を微量含む。西にいくにしたがい褐色(7.5YR4/6)粘土質シルトが小ブロック(5~10cm)で混じる。層厚は約10~40cmを測り、西側で厚くなる。弥生時代~中世の遺物を含む。

第3層 灰色(7.5Y4/1)シルト層。1mm大の砂粒がレンズ状に堆積する。炭化物を微量に含む。調査地の西側約4mより西に広がる。溝1(中世)内の堆積層である。層厚は約10cmを測る。

第4層 オリーブ黒色(7.5Y3/1)に赤褐色(5YR4/6)が斑点状に混じる粘土質シルト層。1~2cmの礫を微量、2~5mmの礫を少量含む。溝1(中世)内の堆積層である。層厚は約10~20cmを測る。

第5層 黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土層。下部にいくにしたがいシルト質が強くなる。5



第3図 断面実測図

~10cmの礫を微量、1~2cmの礫を少量、5mm以下の礫を多量に含む。炭化物を少量含む。溝3(弥生時代)内の堆積層である。

第6層 黒褐色(10YR3/1)シルト質粘土層。5~20cmの礫を微量、1~2cmの礫を少量、5mm以下の礫を多量に含む。炭化物を微量に含む。溝2(弥生時代)内の堆積層である。

第7層 暗赤褐色(5YR3/4)と黒褐色(10YR3/2)が混じる粘土層。0.5~1mm大の砂粒を微量含む。弥生時代と中世の造構面。

### 3. 造構

第7層上面で中世と弥生時代の造構を検出した。中世の造構は溝1条と落ち込み1ヶ所を検出した。弥生時代の造構は溝2条と木棺墓1基を検出した。本調査地は第7次調査地の南に隣接するので、第7次調査地と対照しながら造構の説明を記す。

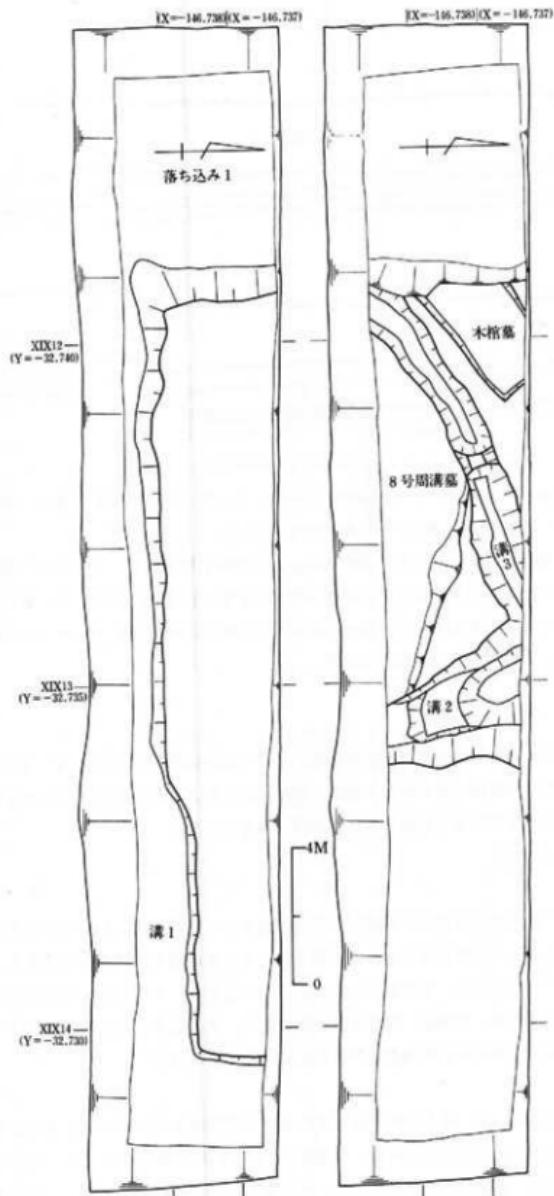
#### 中世の造構(第4図)

##### 溝1

調査地東側で南北方向に伸び、南側でL字形に曲がって東西方向に伸びる溝である。東と南肩が調査地外にある。西側は落ち込み1と切り合っているが前後関係は不明である。溝底は西側に向かってやや深くなる。残存幅1.2m、深さ0.2mを測る。東側では10~20cmの石が集石していた。溝内より瓦器、土師器、陶器などが出土した。出土遺物より溝の時期は13~14世紀と考えられる。東側部分は第7次調査地のSD64に統くと思われる。

##### 落ち込み1

調査地西側で検出した。溝1と切り合っているが前後関係は不明である。落ち込みとしたが第7次調査のSD64に統くと思われる。残存幅3.4m、深さ0.4mを測る。落ち込み内より輸入磁器、陶器、瓦器、土師器などが出土した。出土遺物より落ち込みの時期は14~15世紀と考えられる。



第4図 中世遺構実測図

第5図 明生時代遺構実測図

### 弥生時代の遺構(第5図)

#### 溝2

調査地中央で検出した。北西から南東方向に伸びる溝である。溝幅は北で2.2m、南で0.9mを測る。溝底は南より北に向かって3段に掘削されており、1段目が19cm、2段目が42cm、3段目が68cmを測る。溝内より壺、甕、鉢、高杯などの土器や石庖丁、蜻蛉などが出土した。遺物は溝の上層から中層にかけて多く認められた。出土遺物より溝の時期は第II～IV様式と考えられる。第7次調査のNo.3-Nに統くと思われる。

#### 溝3

調査地西側で検出した。北東から南西方向に伸びる溝である。南西部の肩を落ち込み1に切られる。溝は幅0.5～0.7m、深さ28～41cmを測る。溝中央部に陸橋を削り残してお

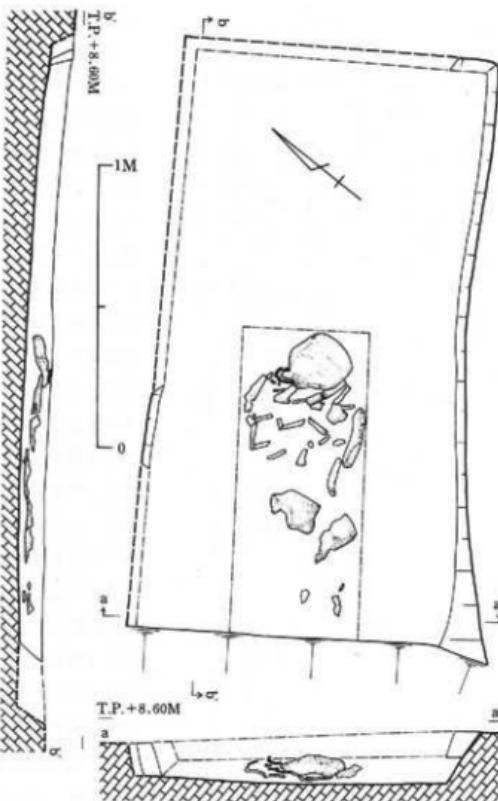
り、上部幅22cm、下部幅55cm

を測る。溝内より壺、甕、蓋などが出土した。出土遺物より溝の時期は第II～IV様式と考えられる。第7次調査のNo.3-Nに統くと思われる。

#### 木棺墓(第6図)

溝3の西側で検出した。西側部を落ち込み1によって切られており、北東隅が調査地外にある。主軸がN-52°-Eを向く。木棺墓の掘方は長方形を呈すると考えられ、長さ220cm以上、幅108cm、深さ10cmを測る。埋土は黒褐色(10YR3/1)シルト質粘土である。棺材は残っていないが、棺内に盛土が落ち込んでおり、明黄褐色(10YR7/6)粘土が埋っていた。木棺の規模(第6図の破線部分)は長さ110cm以上、幅43cmを測る。木棺内には人骨が残っているが、保存状態は悪い。頭位は北東を向いている。

掘方内より壺、甕の破片が出土した。木棺墓の時期は第II～IV様式と考えられる。



第6図 木棺墓実測図



第7図 方形周溝墓配置図

#### 第7・26次調査の遺構(第7図)

第7次調査地と第26次調査地は隣接する。今回の調査で検出した遺構は第7次調査地の遺構と関連するものがあるのでまとめておきたい。弥生時代の遺構は溝2・3と木棺墓を1基検出した。詳細については前項で記した。第7次調査地では弥生時代の方形周溝墓が7基検出されている。今回、検出した溝2・3は方形周溝墓の周溝である。第7・26次調査の図面を照合した結果、溝2・3は第7次調査地の3・5号周溝墓が共有する周溝No.3-Nに続くことが明らかになった。溝2・3の検出によって新たに2基の方形周溝墓が確認された。第7次調査で検出した方形周溝墓の番号を踏襲し、8号周溝墓、9号周溝墓とする。8号周溝墓は溝2・3によって区画されており、調査地の南側へ広がる。主体部は不明である。9号周溝墓は溝3と第7次調査地のNo.4-Wによって区画されている。第7次調査地では中世の削平を受けており、主体部が検出できなかった。今回、溝3の北側で木棺墓を1基検出した。木棺墓は9号周溝墓の主体部であることが確認できた。9号周溝墓の主体部は南側に位置することから、追葬時のものと考えられる。3号周溝墓は溝2と第7次調査地のNo.3-EとNo.3-Nによって区画されている。3号周溝墓は8号周溝墓と溝2の周溝を共有する。3号周溝墓の東西長は13.8mを測る。

#### 4. 遺物

弥生時代～中世に至る遺物が出土した。弥生時代の遺物は土器、土製品、石器がある。古墳時代～中世の遺物は須恵器、土師器、瓦器、輸入磁器、陶器、土製品、錢貨がある。遺物は遺構及び包含層から出土した。以下、各遺物について説明を記す。

##### 1). 土器

溝2(第8・9図)

溝2より第II～IV様式の弥生土器が出土した。器種は壺、高杯、蓋、鉢、甕がある。

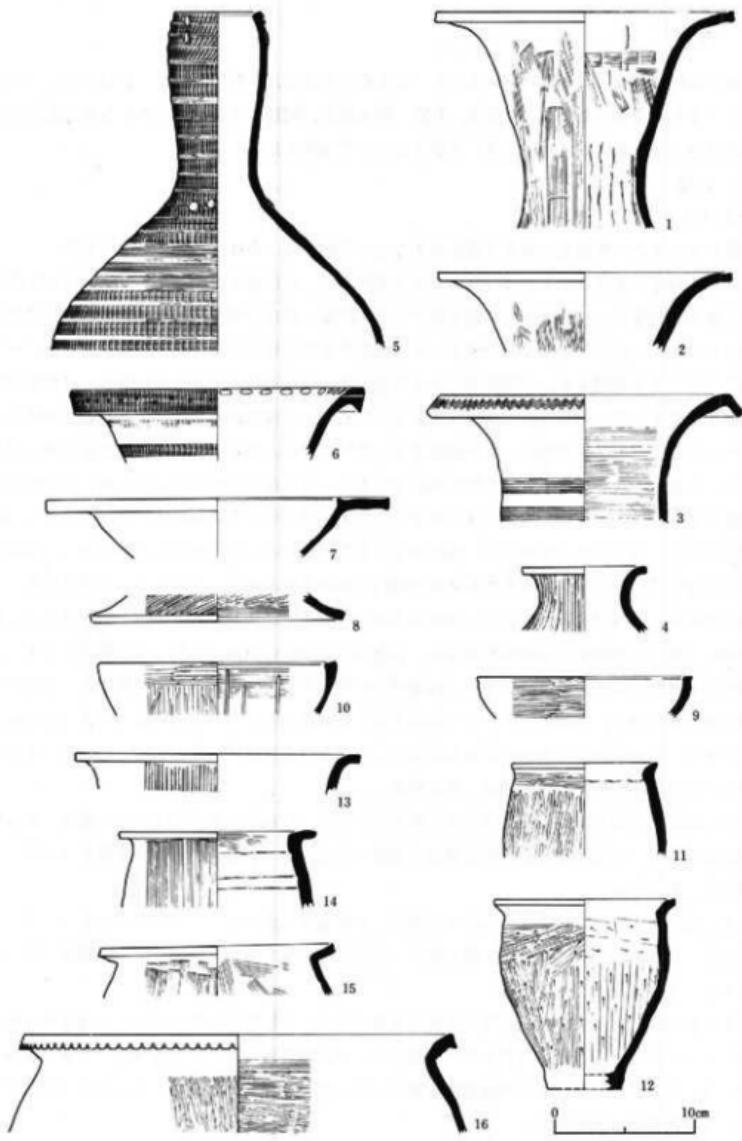
1～6は壺である。1・2は口頸部が大きく外反し、口縁端部が面をもつ。1は口縁部内外面を横ナテ調整する。頸部外面は縱方向のハケメ調整、内面は横及び斜め方向のハケメ調整を部分的に施す。内面にしづら痕が残る。2は内面をナテ調整で終る。非河内産。第II様式。3は筒状を呈する頸部より、口縁部が大きく外反する。口縁端部は下方へ折れ曲る。口縁端部に櫛描波状文を1帯、頸部外面に櫛描直線文を2帯施す。口縁部内外面は横ナテ調整、頸部外面はナテ調整、内面は横方向のハケメ調整する。生駒西麓産。第II様式。4は筒状を呈する頸部より、口縁部が短く外反する。口縁端部は面をもつ。口縁部内外面は横ナテ調整、頸部外面は縱方向のハケメ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明。生駒西麓産。第II様式。5は細頸壺である。張りのある胴部より、頸部が長く上方へ伸びる。口縁部はゆるく内弯し、口縁端部が内傾して面をもつ。口頸部から胴部の外面に櫛描文様を施す。上部より15帯の簾状文、3帯の直線文、4帯の簾状文を施す。口縁部外面には縱方向に2個1対、頸部と胴部外面には横方向に2個1対の円形浮文を貼り付ける。口縁部から胴部の外面には縱方向に帯状を呈する赤色塗料を塗る。文様帯間は研磨する。内面はナテ調整する。生駒西麓産。第III様式。6は口頸部が漏斗状に伸び、口縁端部を下方へ拡張する。口縁端部に1帯、頸部外面に2帯の櫛描簾状文を施す。口縁端部には円形の刺突文を施す。口縁部内面には円形浮文を貼り付ける。風化が著しく調整法は不明。生駒西麓産。第II様式。

7は高杯の杯部である。杯部は大きく外上方へ伸び、口縁部が水平方向に折れ曲る。口縁端部は面をもつ。杯部と口縁部の境に断面三角形の凸帯がつく。風化が著しく調整法は不明。非河内産。第II様式。

8は甕の蓋である。ゆるく裾広がりに伸び、口縁端部が面をもつ。外面は横方向のヘラミガキ調整、内面はハケメ調整の後、横方向のヘラミガキ調整する。口縁部内面には帯状に煤が付着する。生駒西麓産。第II様式。

9・10は鉢である。体部が内弯しながら立ち上がる。口縁端部は面をもつ。9は体部外面を横方向のヘラミガキ調整、内面をナテ調整する。10は体部外面の上部を横方向、下部を縱方向のヘラミガキ調整する。体部内面は横方向のハケメ調整の後、粗い縱方向のヘラミガキ調整する。生駒西麓産。第III様式。

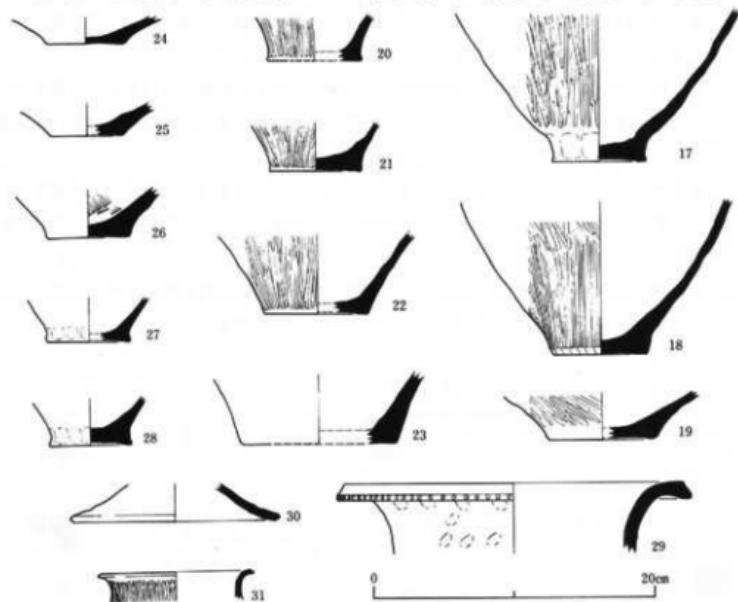
11～16は甕である。11・12は胴部の張りは少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は面



第8図 溝2出土土器実測図

をもつ。11は口縁部内外面を横ナテ調整する。体部外面は上部を横方向、下部を縦方向のヘラミガキ調整する。内面はナテ調整する。12は口縁部内外面を横ナテ調整する。体部外面はヘラケズリ調整の後、上部を横及び斜め方向、下部を縦方向のヘラミガキ調整する。内面はヘラケズリ調整するが粗雑である。13は口縁部が大きく外反し、口縁端部が面をもつ。口縁部外面は縦方向のハケメ調整、内面は横ナテ調整する。14は張りの少ない胴部より、口縁部が強く外反する。口縁端部はやや面をもつ。口縁部外面は横ナテ調整、内面は横方向のハケメ調整する。胴部外面は縦方向のハケメ調整、内面はナテ調整する。内面に接合痕が残る。15・16は張りのある体部より、口縁部がく字形に外反する。口縁端部は15が上方へ、16が下方へ拡張する。15は口縁部外面を横ナテ調整、胴部外面を縦及び斜め方向のハケメ調整する。16は口縁端部にキザミ目を施す。口縁部外面は横ナテ調整する。胴部外面は縦方向のヘラミガキ調整、内面は横方向のハケメ調整する。14は非河内産。他は生駒西麓産。11～14は第II様式。15・16は第III様式。

17～28は底部である。底部は平底であり、胴の張りの少ない17や大きく張る19などがある。外面はヘラケズリ調整の後、縦方向のヘラミガキ調整する17、縦方向のハケメの後、縦方向のヘラミガキ調整する18、縦方向のヘラミガキ調整する19～22、ナテ調整する24～26がある。他は風化が著しく調整法は不明。内面はハケメ調整の後、ナテ調整かナデ調整だけで終る。17・



第9図 清2・3、木棺墓出土土器実測図

21・23は非河内産。他は生駒西麓産。

溝2からは細片のため図化できなかったが回線文を施す第Ⅳ様式の壺、鉢などが出土している。

#### 木棺墓(第9図)

木棺墓より第II様式の弥生土器が出土した。器種は壺である。

29は壺である。筒状を呈する頸部より、口縁部が大きく外反する。口縁端部は下方へ拡張する。口縁端部にはキザミ目を施す。口縁部内外面は横ナデ調整、胴部内外面はナデ調整する。生駒西麓産。

#### 溝3(第9図)

溝3より第II様式の弥生土器が出土した。器種は蓋と甕がある。

30は甕の蓋である。体部が裾広がりに伸び、口縁端部が丸く終る。口縁部内外面は横ナデ調整、体部内外面はナデ調整する。生駒西麓産。

31は甕である。張りの少ない胴部より、口縁部が大きく外反する。口縁端部は丸く終る。口縁部外面は縦方向のヘラミカギ調整、内面はナデ調整する。生駒西麓産。

#### 落ち込み1(第10図)

落ち込み1より中世の土器が出土した。土師器、陶器、瓦器、輸入磁器がある。

32は土師器の羽釜である。張りの少ない体部より、口縁部が強く外反する。口縁端部は面をもつ。口縁部外面は横ナデ調整、体部外面はナデ調整する。

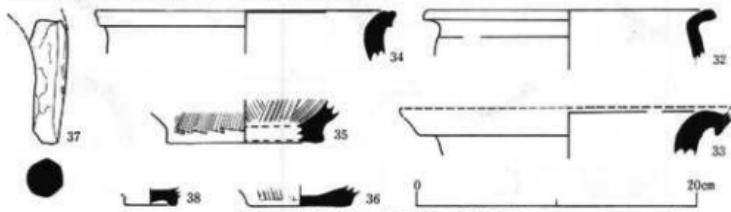
33・34は陶器の甕である。33は口縁部が外上方へ強く外反し、口縁端部は上下へ拡張する。内外面は横ナデ調整する。34は口頸部が上方へ伸び、口縁端部を上方へ拡張する。内外面は横ナデ調整する。

36は瓦器の摺鉢、37は羽釜である。36は平底の底部である。外面は縦方向のハケメ調整、内面はナデ調整する。37は羽釜の脚部である。やや弯曲し、下部に向かって細くなる。外面はナデ調整する。

38は輸入磁器である。白磁の皿である。高台は低く、断面形が逆台形を呈する。高台にアーチ状の抉りを入れる。内外面はロクロナデ調整し、全面に施釉する。

#### 溝1(第11図)

溝1より中世の土器が出土した。瓦器がある。



第10図 落ち込み1、溝1出土土器実測図

35は瓦器の摺鉢である。平底の底部より、体部が外上方へ伸びる。体部内面には8条のおろし目を施す。体部外面は縱方向のハケメ調整、内面はナテ調整する。

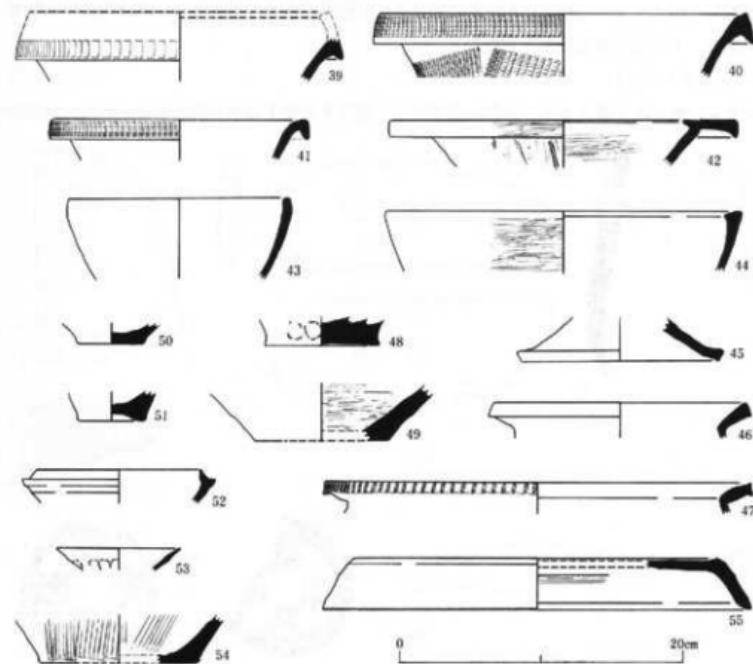
#### 包含層出土土器(第11図)

第1～2層の遺物包含層より弥生時代～中世の土器が出土した。弥生土器、須恵器、土師器、瓦器がある。

39～51は弥生土器である。壺、高杯、鉢、甕の器種がある。

39は壺である。口頸部は漏斗状を呈し、口縁端部を上下へ幅広く拡張するが、上方は欠損する。口縁端部に櫛描籠状文を施す。風化が著しく調整法は不明。生駒西麓産。第III様式。40・41は壺である。口頸部は漏斗状を呈し、口縁端部を下方へ拡張する。40は口縁端部と口頸部外面、41は口縁端部に櫛描籠状文を施す。生駒西麓産。第III様式。

42は高杯である。杯部は大きく外上方へ伸び、口縁部が水平方向に折れ曲る。口縁端部はやや下方へ拡張する。杯部と口縁部の境に断面形が三角形を呈する凸帯がつく。口縁部内外面と杯部内面は横方向、杯部外面は縱方向のヘラミガキ調整する。生駒西麓産。第II様式。45は高杯の脚部である。ゆるく裾広がりになり、端部が面をもつ。内外面は横ナデ調整する。生駒西



第11図 包含層出土土器実測図

麓産。第II様式。

43は鉢である。体部が深い椀状を呈し、口縁部がやや内寄する。口縁端部は丸く終る。口縁部内外面は横ナテ調整、体部内外面はナテ調整する。生駒西麓産。第II様式。44は鉢である。体部は外上方へ伸び、口縁端部が面をもつ。外面は横方向のヘラミガキ調整、内面は横ナテ調整する。生駒西麓産。第III様式。

46・47は甕である。口縁部がく字形に外反し、口縁端部が面をもつ。47は口縁端部にキザミ目を施す。口縁部内外面は横ナテ調整する。生駒西麓産。第III様式。

48~51は底部である。平底を呈する48~50と上げ底を呈する51がある。生駒西麓産。

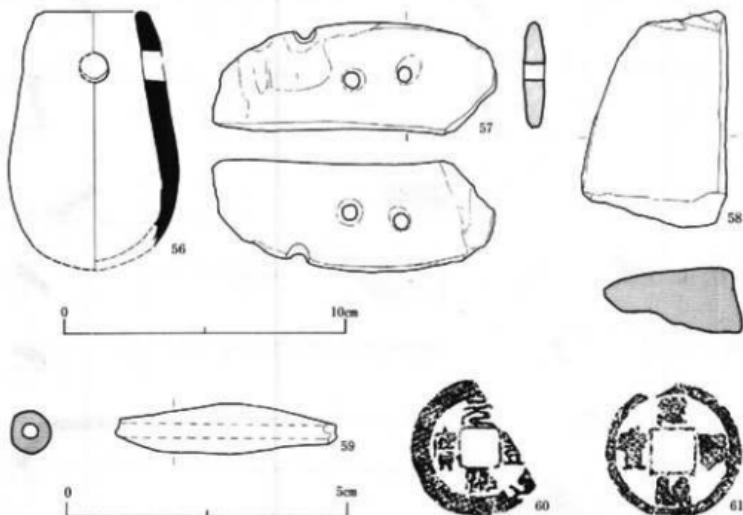
52は須恵器の皿である。浅い皿状を呈する体部より、受部が水平方向に伸びる。口縁部は短く外反し、口縁端部が丸く終る。内外面は回転クロナテ調整する。

53は土師器の皿である。体部が外上方へ伸び、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終る。口縁部内外面と体部内面は横ナテ調整、体部外面はナテ調整する。

54・55は瓦器である。54は摺鉢である。平底の底部より、体部が外上方へ伸びる。外面は縱方向のハケメ調整、内面はナテ調整する。体部内面に7条のおろし目を施す。55は蓋である。天井部が平坦であり、口縁部がハ字形に伸びる。口縁端部はやや面をもつ。口縁部内外面は横ナテ調整、天井部外面はナテ調整する。

## 2). 土製品(第12図)

土製品は蛸壺と土錘がある。56は蛸壺である。底部を欠損するが丸底と考えられる。体部が



第12図 土製品、石製品、銭貨実測図

内傾しながら口縁部に至る。口縁端部は丸く終る。口縁部に小円孔を1孔穿つ。口縁部内外面は横ナナ調整、体部内外面はナナ調整する。非河内產。溝2出土。第II～IV様式。59は上鍾である。両端で径が小さく、中央部が最大径を有する。中央に孔を1孔穿つ。落ち込み1出土。14～15世紀。

### 3). 石器(第12図)

石器は石庖丁と用途不明の磨製石器がある。57は半月形を呈する石庖丁である。刃部は直刃であり、一面のみを斜めに磨く。背は丸く終る。身の中央に2孔1対の紐穴を穿つ。背部の1ヶ所に孔を穿った痕跡が残る。溝2出土。第II～IV様式。58は用途不明の磨製石器である。1面に磨いた痕跡が残る。他は割れており不明。溝2出土。第II～IV様式。

### 4). 銭貨(第12図)

60・61は銭貨である。60は元豊通宝、61は元祐通宝であり、共に北宋銭である。第2層出土。

## IV. まとめ

西ノ辻遺跡は昭和16年より調査が実施され、今回で第26次調査になる。第26次調査では弥生時代～中世の遺構、遺物を検出した。今回の調査は67m<sup>2</sup>と狭い範囲ではあったが、得られた知見を列記してまとめとしたい。

1. 遺構は弥生時代と中世の2時期がある。第7層の同一面で2時期のものが検出された。弥生時代の遺構は中世の時期に大規模な削平を受けていると考えられる。今回の調査地西側に位置する第8次調査地では、ほとんど弥生時代の遺構は認められず、深い溝などが残るのみである。
2. 西ノ辻遺跡の第7次調査では7基の方形周溝墓が確認されているが、今回、新たに2基を検出した。第7次調査ではマウンドが中世の削平を受けており、主体部は4号周溝墓で小児用の櫛棺を検出したのみであった。そのため、厳密には墓と決定していないが、溝で区画されていることなどから方形周溝墓として取り扱っている。今回、9号周溝墓の主体部と考えられる木棺墓を1基検出したことから、第7次調査地のものも方形周溝墓として決定してよいと考えられる。
3. 方形周溝墓の溝2は陸橋をつくっている。また、溝3も3段で掘っており、南側に陸橋をつくっていると考えられる。第7次調査で検出された方形周溝墓にも陸橋をつくっている。また、大部分の方形周溝墓は周溝を共有している特徴があげられる。今回の調査でも8号周溝墓が3号周溝墓、9号周溝墓が8号周溝墓と周溝を共有していることが確認された。このことから、西ノ辻遺跡の方形周溝墓は計画的に築造していくと考えられる。
4. 方形周溝墓の周溝内より第II～IV様式の土器が出土した。第7次調査で検出されたものと同時期である。また、周溝内の上層から中層に多く遺物が認められた。穿孔を有する土器が第7次調査で多く認められている。周溝の上・中層に多く認められることから、築造時の供獻土器とは考えがたい。また、今回の調査では石庖丁や靖壺なども出土しており、今後の検

討が必要である。

5. 弥生時代中期の婧壺が出土した。婧壺は弥生時代の海岸線に近い集落では多量に出土するが内陸部では数少ない。東大阪市では瓜生堂、鬼虎川遺跡などがある。当遺跡出土のものは胎土中に生駒西麓産にみられるような鉱物を含んでおらず、搬入品と考えられる。弥生時代の流通を考える上では貴重な資料である。

#### 注

- ① 東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会 「発掘20年のあゆみ」 1987年
- ② 東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会 「神並遺跡II」 1987年
- ③ 東大阪市教育委員会 「日下遺跡第11次調査」「東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要26」 1983年  
東大阪市教育委員会 「日下遺跡第13次発掘調査」「東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要27」 1986年
- ④ 東大阪市遺跡保護調査会 「縄手遺跡2」 1976年
- ⑤ 東大阪市教育委員会 「縄手遺跡第10次調査」「東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要28」 1987年
- ⑥ 東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会 「西ノ辻遺跡、鬼虎川遺跡」 1988年
- ⑦ (財)東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会 「鬼虎川遺跡第12次発掘調査報告」 1987年
- ⑧ (財)東大阪市文化財協会 「甦る河内の歴史」 1984年
- ⑨ 東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会 「神並遺跡III」 1988年
- ⑩ (財)東大阪市文化財協会 「法通寺」 1985年
- ⑪ 注⑥と同様
- ⑫ 生駒西麓産としてあつかった土器は、胎土中に石英、長石、角閃石、雲母、クサリ礫を含むものであるが、特に角閃石の有無を基準にした。

発掘調査にあたっては多くの人達のご協力をいたいでいる。記して感謝の意を表します。

島村和宏 別所秀高 本田けい子 三浦一己 高橋祐子



1. 東壁断面



2. 溝1、落ち込み1

図版2 西ノ辻遺跡  
遺構



1. 中世遺構全景



2. 弥生時代遺構全景

図版3 西ノ辻遺跡 遺構



1. 溝2、3



2. 溝2

図版4 西ノ辻遺跡 遺構



1. 溝3



2. 溝3 内壁



1. 木棺蓋

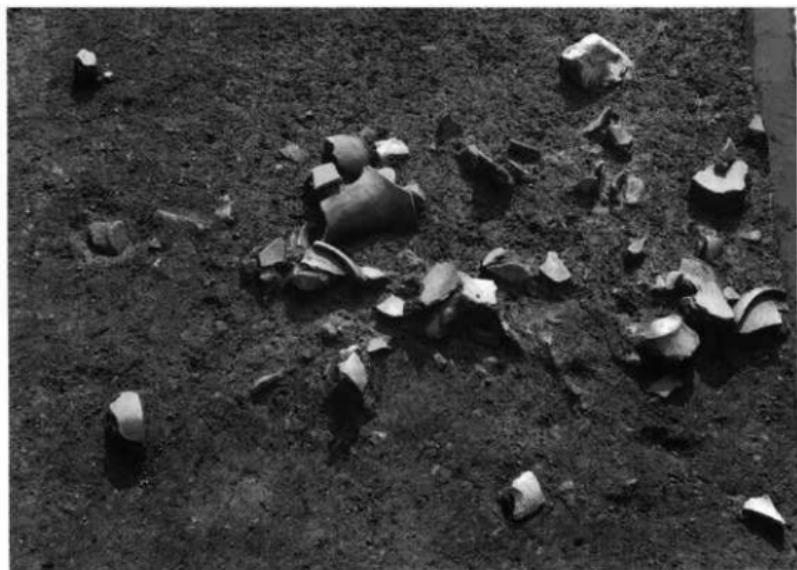


2. 木棺蓋

図版6 西ノ辻遺跡 遺構



1. 溝2内遺物出土状況

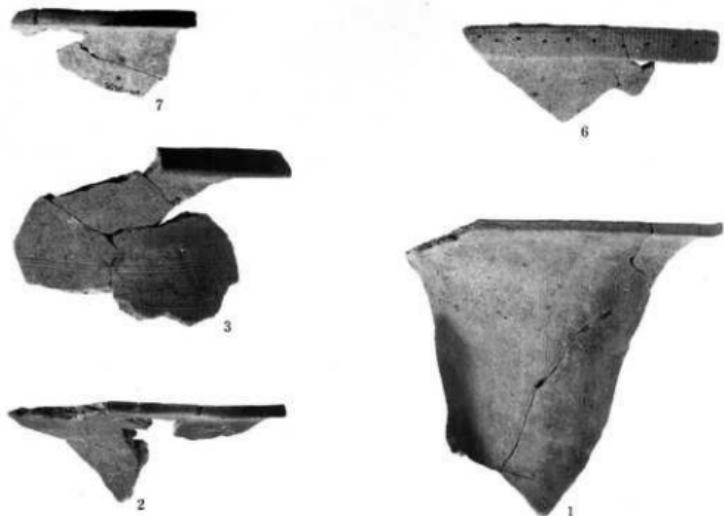


2. 溝2内遺物出土状況

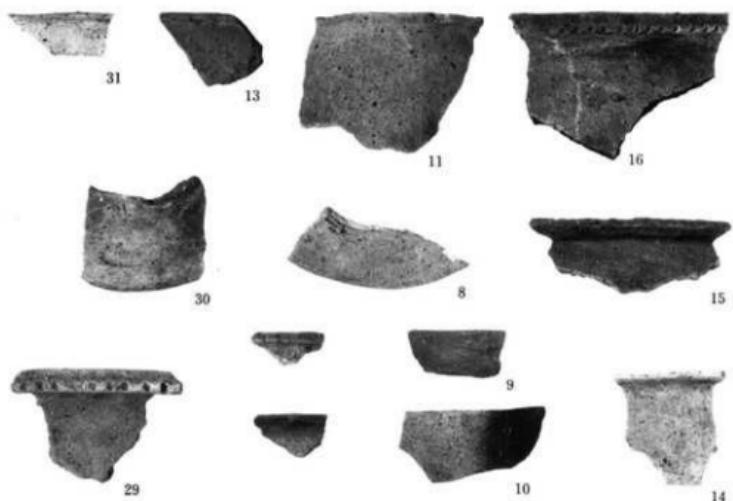


溝2、包含層出土遺物 弥生土器、婧壺、石庵丁、土鍬、銭貨

図版8 西ノ辻道路 遺物

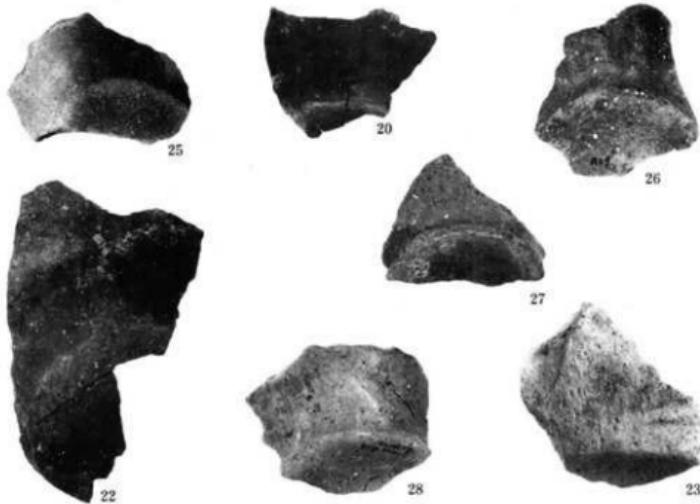


1. 溝2出土土器 弥生土器

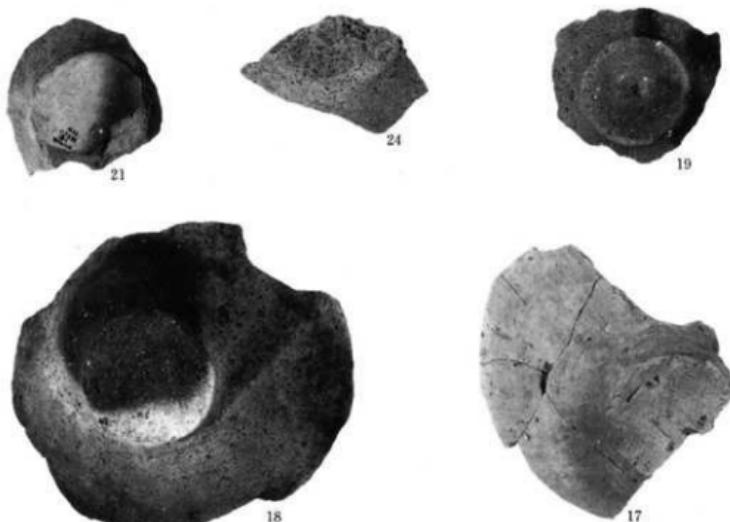


2. 溝2・3、木棺墓出土土器 弥生土器

圖版 9 西ノ辻遺跡 遺物

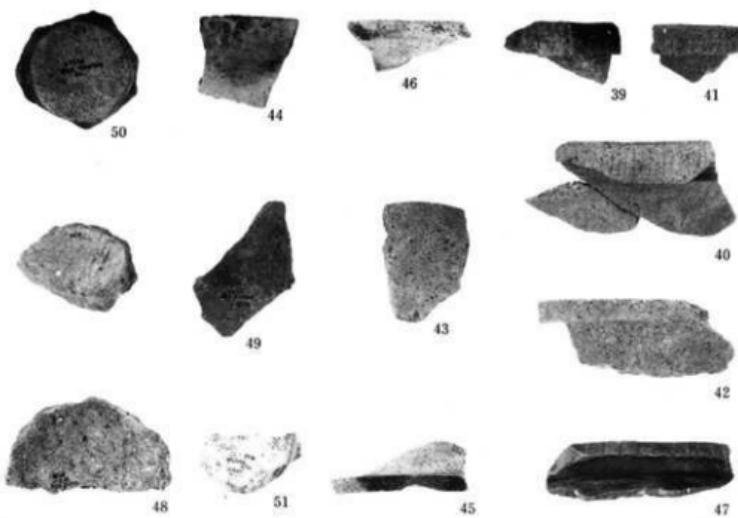


1. 溝 2 出土土器 弥生土器

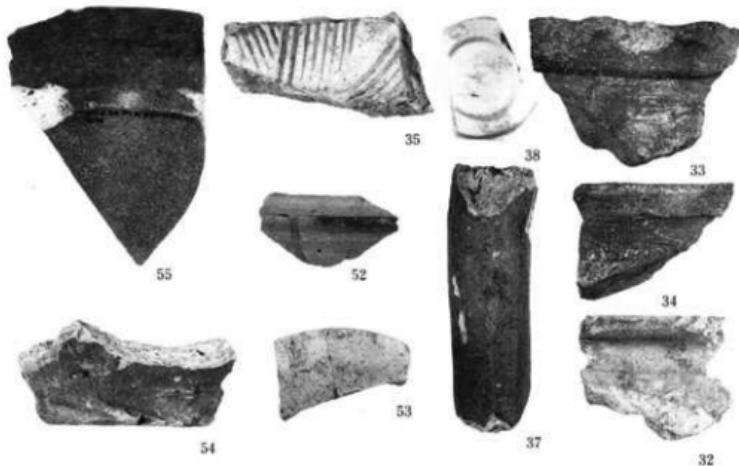


2. 溝 2 出土土器 弥生土器

図版 10 西ノ辻道路遺物



1. 包含層出土土器 弥生土器



2. 落ち込み 1、溝 1、包含層出土土器 須恵器、陶器、輸入磁器、土師器、瓦器